公益社団法人群馬県老人保健施設協会

協会だより ひろば

2026 AUGUST vol.48



全老健ではROKENくんの47都道府県バージョンとなる「ご当地ROKENくん」を制作しました。群馬県バージョンは「だるま」と「焼きまんじゅう」がモチーフとなっています。「皆さん、よろしくね!!」



- 介護への理解促進事業
- みてみよう!みんなの作品
- 施設の「ここにご注目‼」コーナー
- これ知ってました?
- 第5回　チームを育てるリーダーシップ

二つの文明の調和と、人間の「身体性」

全国老人保健施設協会　群馬県支部長
公益社団法人群馬県老人保健施設協会　理事長
服部徳昭

現代社会は、絶え間ない変化と情報の肥大化を求める「熱い文明」の極みにあります。人工知能（ＡＩ）をはじめとする目覚ましいテクノロジーの進化は、私たちに膨大なデータと効率性をもたらしました。医療や介護の現場においても、これら最新の技術は強力なサポートツールとなり得るでしょう。しかし、どれほど優れたＡＩであっても、決して超えられない絶対的な限界が存在します。

文化人類学者のレヴィ＝ストロースは、絶え間ない変化を求める社会を「熱い文明」、自然のサイクルと同調し不変を尊ぶ社会を「冷たい文明」と呼びました。日本人は古来、自然の中で木が生い茂り、水が滲み出る大地とともに生き、そこに宿る命の連環を肌で感じてきました。川田順造氏が指摘したように、日本人が培ってきた優れた身体的技術、それは言わば「量子論的な重ね合わせ」を全開にしたような精緻な機能であり、道具と身体を調和させる知恵でした。しかし現代の私たちは、それらの豊かな身体性を熱い文明の中だけで限定的に使い、人間一人ひとりが持つ大切な何かを失いつつあるのではないでしょうか。

どれほど精巧な言葉を紡ぐＡＩであっても、湿った大地の匂いや湧き出る水の冷たさ、そして人と人が触れ合う瞬間に宿る「命の気配」を本当の意味で体験することはできません。物理的な身体を持たない存在は、自然の中で生きていくことはできず、一日で電池が切れれば動かなくなる儚い存在に過ぎません。

私たち医療や介護に携わる者が日々向き合っているのは、データやアルゴリズムではなく、生身の人間が持つ「いのち」の営みそのものです。認知症や心身の衰えを抱える高齢者のケアにおいて真に求められるのは、効率性だけではなく、人間の底流に流れる「もののあはれ」の感性であり、五感を通じて響き合う身体的な調和です。これこそが、私たちが忘れてはならない「冷たい文明」の知恵です。

ＡＩという熱い文明の利器は、あくまで人間の傍らでサポートを行う「伴奏者」に過ぎません。真の主役は、大地を踏み締め、他者と関わり、自然とともに生きる人間自身です。道具の限界を冷徹に見抜き、それを賢明に使いこなしながら、人間らしさの本質を守り抜くこと。熱い文明の荒波の中で、冷たい文明の豊かさを調和させていくことこそが、これからの地域医療や福祉を支える私たちの道標となるはずです。

地域の小学校と連携した出張授業の取り組み
（介護への理解促進事業）

介護老人保健施設せせらぎ苑
支援相談員　小板橋 誠

当施設では、３年前から地域貢献活動の一環として、年に一度、地域の小学校で出張授業を実施しています。老人保健施設協会の介護への理解促進事業も活用しながら、地域の子どもたちに介護や福祉について知ってもらう機会として取り組んでおります。３年前に導入したときの流れを簡単に説明させていただきます。通常の流れである「小学校から老人保健施設協会へ依頼し、協会から施設へ依頼が届く」という方法ではなく、当施設から地域の小学校へ直接お声がけをしました。その際には、施設の取り組みや出張授業の目的についてご理解とご協力をいただきました。施設職員の子どもが通っている学校でもあったため、担当の先生や校長先生との連携も円滑に進めることができました。当施設の場合4年生の福祉の授業を2コマ分、福祉の授業の導入時に実施しています。授業内容については小学校の担任の先生と相談し、「介護や福祉の話を聞くだけでなく実際に体験してもらったほうが生徒は楽しいと思う」とアドバイスを頂き、車いすの体験や看護体験など取り入れて実施しています。

また、当日は施設で働いているさまざまな職業の紹介も実施しております。当日授業に行く職員と事前に動画撮影して当日動画を流す職員に分け聞いていただきました。各職種の希望者が増え、何年後かに施設で一緒に働く子がいるといいなと思いを込めて説明をさせていただきました。

準備は少し大変ですが地域とのつながりを感じられ、子どもたちに介護・福祉の魅力を伝えられる貴重な取り組みだと感じています。引き続き協力して取り組んでいきたいと思います。



初年度は教室で行いましたが体験型にしたので現在は体育館で実施しています





【子どもたちの感想】

○いろいろな介護や福祉の仕事の内容が聞けて良かった
○心臓の音を聴きました。自分の心臓の音を聴いた後友達の心臓の音を聴いたら友達の心臓の音の方が早かったです
○いろいろな体験ができてうれしかった。車椅子はケガをしないとのれないので今回体験出来てよかった
○ケアマネジャーは長い年月をかけてその仕事につけるのだとわかった
○管理栄養士は高齢者の食事を作っているから私たちの給食を作っている人みたいだった

みてみよう！みんなの作品

群馬県老人保健施設協会紙上作品展の開催にあたって

相変わらずの猛暑が続き、豪雨、雷雨の被害も県内でみられておりますが、皆様方におかれましてはご健勝のことと存じ上げます。

さて、今年度も老健作品展は協会広報誌「ひろば」にて紙上開催いたします。会場開催とは異なり、紙面からでは臨場感や作品のリアルな感動が伝わりにくいかもしれません。一方、時間の制約がなく、様々な施設の方からの力作をゆったりと眺めることが出来るという楽しみ方もあります。

各老健における利用者様やスタッフの方たちの取組みの成果をご覧いただくことで、皆さまの施設でも今後の作品づくりを通した個別の、あるいは集団での目標の一助となることを期待いたします。

今後の作品展に関しては、会場開催に伴うスタッフ負担など対応が厳しい状況が続いているため、「ひろば」での紙上開催を余儀なくされるかもしれません。また、老健協会ホームページなどで動画配信を行うなど、今までにない形式での作品の発表機会について実行委員会で検討を重ねております。

皆さまの施設で、今後も作品づくりや作品展での発表が、利用者様のやりがいや楽しみにつながることを祈念いたします。

作品展実行委員長　プランタンおおまま　施設長　水間春夫

二之沢パナケア　介護老人保健施設



介護老人保健施設　リハビリホーム喜望峰















きれいなお花が、ホールやお部屋を彩っています♪

介護老人保健施設　すみれの里



こいのぼりやフェルトバック、
カーネーションなどたくさん
製作して頂きました。



よく見るとカエルの歌
のメロディーに
なってます。









利用者様が製作された力作の
アジサイはデイフロアの
中心に飾られてます。



介護老人保健施設　若宮苑




〈通所リハビリ〉壁画　兜



〈専門棟　あずみ〉藤の花





〈一般棟〉風鈴








ご注目!!」コーナー

介護老人保健施設
老健くろさわ

ICT機器導入による業務効率化とケアの質向上

介護グループ係長(介護福祉士)　小林 康洋

介護老人保健施設老健くろさわでは、理念である「笑顔あふれる暮らしの継続」を実現するため、ICT機器の導入を積極的に進めています。ご利用者様の生活を支えながら、医療・介護・リハビリを一体的に提供するためには、正確な情報共有と迅速な意思決定が欠かせません。当施設では、ICT化を基盤とした業務効率化・安全性向上・職員負担軽減を同時に実現する環境整備を進めています。



見守りシステムやナースコールのデジタル連携により、夜間の安全確保や転倒リスクへの早期対応が可能となり、利用者の皆さまが安心して生活できる環境が整いました。また、ケア記録をiPadで運用することで職員は記録作業に追われる時間が減り、利用者の方と向き合う時間をより多く確保できています。さらに入浴方法の選択肢を広げるため、シャワー浴型機械浴「アラエル」を導入しました。従来の湯船に浸かる入浴では実現が難しかった、ウルトラファインバブルシャワーによる低刺激でやさしい洗浄が可能となり、肌への負担を抑えながら清潔を保つことができるようになりました。これにより、ご利用者様の身体状況に合わせたより快適で安全な入浴支援を提供しています。





ICT化は単なる機器導入ではなく、利用者の生活の質を高め、職員が誇りを持って働ける環境をつくるための基盤です。老健くろさわはこれからも、介護の専門性とテクノロジーを融合させ、地域に信頼される施設づくりを進めてまいります。

介護老人保健施設
まゆ玉

心もお腹も大満足!笑顔あふれる「食と音楽」のイベント

介護サービス統括長　佐藤 誠司

まゆ玉は伊勢崎市の南部、利根川を渡れば埼玉県という場所に位置しております。

工業団地内にありますが、施設の周りには緑も多く、敷地内には河津桜もあり春には一足早く利用者様の目を楽しませてくれます。



2004年に開設し今年で22年を迎えました。入所定員99名(ショートステイ含む)、通所リハビリテーション55名、訪問リハビリテーションを運営しております。

まゆ玉では月に一度、季節に合った行事やイベントを行っています。毎日を元気に楽しく過ごしていただくために、やはり食べること・笑うことは生活していく中では欠かせないものですよね。最近開催された、賑やかイベントをいくつか紹介させていただきます。



・心に響く音色♪
　慰問によるギター演奏。懐かしのメロディーや誰もが口ずさめる名曲の数々に利用者様もうっとり。手拍子を合わせたり、昔を思い出して一緒に歌ったりと心地よい一体感に包まれました。
・ジュージュー美味しい!匂いでも満足!
　「食べる楽しみ」を全力で味わうべくお好み焼きイベントを開催。元お好み焼き職人が作るお好み焼きはフワフワ!!食形態にも配慮し、多くの利用者様に安全に召し上がっていただきました。そして群馬といえば外せない、焼きまんじゅう!!お腹がいっぱいでも「これは別腹!!」と皆さん大満足。フロア全体に広がる、ソース・味噌だれの焦げる香ばしい匂いに、利用者様だけでなく職員も一緒にうっとり。



他にも夏にはアイスクリーム・かき氷、祭囃子にフルート演奏などたくさんのイベントを計画しています。

今後も法人の理念でもある「病める心に安らぎと笑顔を。高齢者の身体に活力を。」を大切に、利用者様に楽しんでいただける時間を提供できるよう努めます。

施設の「ここに

介護老人保健施設
ほくもう

全室個室&ユニットケアでより良いサービスの提供を

事務長(介護福祉士)　唐澤 聡志

当施設は渋川市有馬にあり、北毛保健生活協同組合が運営する北毛病院に隣接する定員50名の平屋建ての施設で、2021年3月に現在地に増設移転してから6年目を迎えました。

そして、その特色は何と言っても「全室個室＆ユニットケア」にあります。施設内は5つのユニットといわれる生活単位に区分されており、各ユニットには10室の個室と共同生活スペース(兼食堂)・浴室・トイレ・サービスステーション等が設けられています。これにより入所者10名様ごとに落ち着いた環境の中で生活ができます。また介護・看護職員もユニットごとに配置されており、基本的には日勤職員を中心に各ユニットの職員が毎日ケアをさせていただくので、入所者様お一人おひとりの生活や介護の状況について把握しやすく、関係性も深まるので、より良いサービスの提供が可能になります。夜間についても、各ユニットの職員もしくは協力ユニットの職員がケアに当たるので安心してお休みいただけます。









老健は在宅復帰のためのリハビリ施設であり長期の入所を前提としてはいませんが、たとえ数カ月であっても入所者様それぞれができる限り「暮らしの継続」を営めるように、これからもケアをアップデートさせていきたいと考えております。

介護老人保健施設
いずみの里

ご利用者様のニーズに応じた通所リハビリテーションを目指して

通所リハビリテーション　支援相談員　三ツ村 修一
事　務　真下 隆行











いずみの里は、群馬県東毛地区の邑楽郡大泉町にあり、入所定員70名、通所リハビリテーション60名で、職員一丸となり毎日明るく元気にサービスを提供しています。

当施設の通所リハビリテーションは、医師の指示のもと、理学療法・作業療法・言語聴覚療法の専門スタッフがご利用者様の心身機能の維持・向上を目指し、日常生活を総合的にマネジメントし、個別のリハビリテーションを提供しています。

通所リハビリテーションの一日の流れは、午前中は入浴とリハビリを中心に行い、午後はご利用者様個々にクラブ活動かレクリエーションのどちらかを選択してもらっています。また、リハビリ希望のある方は午後にも個別に実施し、有意義な時間を過ごしていただいています。

ご利用者様がサービスを利用する目的は様々であり、一人一人の要望に応えられるよう施設全体で取り組んでいます。

写真は、通所リハビリテーションでのクラブ活動とレクリエーションの様子です。5月・6月は端午の節句があったり、アジサイがきれいに咲いていたので、その時々の季節感を感じてもらえるようなクラブ活動やレクリエーションを企画しています。

いずみの里は今後も、ご利用者様が笑顔で充実した毎日を送れるよう、サービスの質の向上に努めていきます。

統合的なアセスメントをもとに介入した結果、変化が見られた事例を紹介します



【事例】

80歳代女性　要介護４　寝たきり度Ａ２　日常生活自立度Ⅲａ

既往歴不明。家族が他界された後は独居。被害妄想が出現し、昼夜問わず家の外に出て路上に蹲っている、食事が摂れなくなる等の理由から施設入所。頭髪が伸びたままで埃やゴミが絡んでおり、長期間理美容を受けていない状態。職員と会話をする事は殆どない。視力低下が著明で手探りで周囲を確認している。

【介入後の変化】

入所時は帰宅願望が強く食事や介護に拒否あり。ヘアカットには快く応じた為、徐々に拒否が減るかと期待したが、食事への拒否は変わらず。脱水や低栄養が懸念され点滴を試みるが、拒否が強く施行困難だった。

丁寧な説明・誘導には拒否が強く、一人でいる方が落ち着いている為、説明や案内、過度な声掛けをなくして距離を置いた。食事の際は手渡しながら「はい」と一声かけてその場を離れると、黙々と摂取された。一見すると不適切な対応にも見えるが、「～ですよ」「～しましょう」と言わない声掛けは適度な距離であった。これをきっかけに食事摂取量が増え、体重が１カ月で１kg増加した。

その後も適度な距離を置いて関わった結果、介護拒否が減り、笑顔で若い頃の趣味や仕事について自ら話して下さるほど職員とコミュニケーションが図れるようになった。

以前もお伝えしたように、介護側から見ると「困ったな」と思う行動でも、ご本人なりの理由があります。その理由を様々な角度から探ること、そして「その人自身」を知ることが、ご本人の安定や私達との関係性の構築につながります。



【引用・参考文献】

「認知症ケアガイドブック」日本看護協会

「パーソン・センタード・ケアでよくわかる認知症看護のきほん」　鈴木みずえ

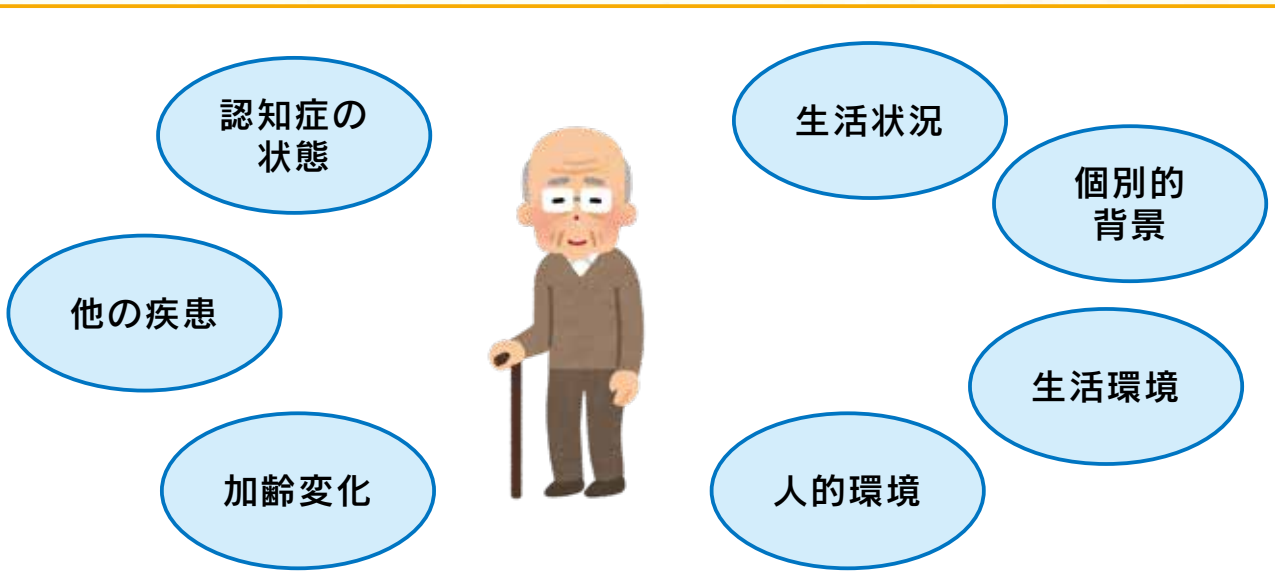
これ知ってました？

これまでは認知症に対する基礎的な知識、私自身の介護体験をお話しさせていただきました。
今回は認知症ケアを実践する上でのアセスメント方法と実際の事例をご紹介します。

介護老人保健施設 和光園　副施設長
認知症看護認定看護師　狩野 京子 先生



認知症のケアにおいては統合的なアセスメントが大切です



上の図にあるように、認知症の状態・他の疾患・加齢による変化・生活状況や生活環境等、その人全体を詳細に観察し、認知症の進行がどのように日常生活に影響するのかをアセスメントした上で支援していくことが大切です。

認知症の種類は？
視力・聴力は？
趣味は？
どんな仕事をしていた？
生活スタイルは？

・今起きている状態とどのような関連があるか
・ケアに活かせることがあるか等を考えて接していきましょう



第5回　チームを育てるリーダーシップ

医療法人大誠会
介護老人保健施設　大誠苑　統括介護部長
黒木 勝紀

これまで、指導においては「叱るのではなく支える」という関わりが重要であることをお伝えしてきました。では、その先にあるリーダーの役割とは何でしょうか。それは、個人を育てることにとどまらず、**「チームを育てること」**にあります。

リーダーというと、「先頭に立って引っ張る人」というイメージを持つ方も多いかもしれません。しかし、これからの時代に求められるリーダーシップのあり方は少し違います。リーダーシップとは単なる役職や立場ではなく、いわば「人々の心を一つにする働きかけ」です。つまり、大切なのは「自分が引っ張ること」そのものではなく、**「メンバーが力を発揮できる状態をつくること」**なのです。

その考え方として、近年注目されているのが**「サーバントリーダーシップ」**です。これはリーダーが前に立って指示を飛ばすのではなく、メンバーの下支えとなり、彼らが能力を最大限に発揮できる環境を整える関わり方を指します。

現場では、つい「リーダーがすべてを決める」「指示を出して動かす」というスタイルになりがちです。一見効率的に思えるかもしれませんが、このやり方では「指示待ち」のメンバーを生み出してしまいます。リーダー一人の力に依存した組織では、チームとしての成長は止まってしまうでしょう。

では、「チームが育つ」とはどのような状態を指すのでしょうか。

それは、メンバー一人ひとりが指示を待つのではなく、自ら考え、行動できる状態です。

ここで重要になるのが「フォロワーシップ」という考え方です。組織の成果は、リーダーの資質だけで決まるものではありません。むしろ、現場を支えるメンバーの主体的な関わりと当事者意識こそが、成果に大きな影響を及ぼします。

リーダーがどれほど立派な理想を掲げても、メンバーが動かなければ意味がありません。逆に、メンバーが自ら考え、互いに支え合いながら動くチームは、非常に強固な組織となります。

そのためにリーダーが意識すべきことは、「教えすぎること」ではなく、**「考える機会をつくること」**です。

- 「あなたはどう思う?」
- 「ほかに方法はあるかな?」
- 「あなたならどうする?」

このような問いかけを通じ、メンバーが自分の頭で考える経験を積み重ねること。それがチーム全体の成長へとつながっていきます。

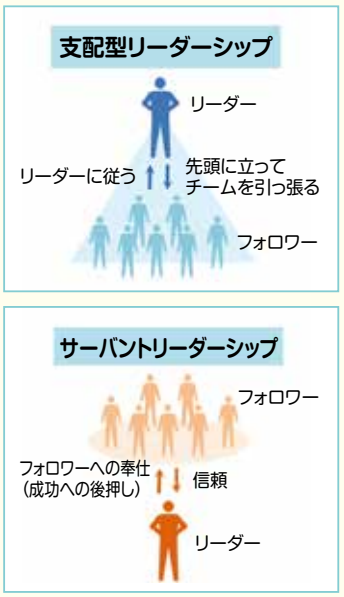
また、リーダーには「心理的柔軟性」も求められます。状況や相手に応じて関わり方を変え、「今、何が必要か」を見極める力です。すべてを丸投げするのではなく、時には的確な指示を出し、緊急時には即断即決する。このバランス感覚こそが、現場の安全と成長の両立を可能にします。

チームを育てるリーダーとは、必ずしも「誰より優秀な人」である必要はありません。「人を活かすことができる人」であればよいのです。

- 自分がすべてやるのではなく、任せる。
- 指示するのではなく、引き出す。
- 評価するだけでなく、共に成長する。

この積み重ねが、**「このチームで働きたい」**と思える職場をつくります。

リーダー一人が背負い、頑張る時代は終わりました。これからは「チームで成果を出す」時代です。その第一歩として、まずはメンバーを「支えるリーダー」であることから始めてみましょう。



メーリングリストご登録のご案内

広報誌「ひろば」、高齢者介護や介護予防等に関する最新情報をお届けするため、メールアドレス登録にご協力ください。QRコードから入力いただけます。

群馬県老人保健施設協会ホームページ

ホームページにて「ひろば」のバックナンバーをご覧いただけます。

あとがき

I　インフルエンザなどの感染症が流行してきていますが、負けずに頑張って行きましょう。

H　気温の変化の激しい季節ですが、疲れの出ないように休息を十分にとってください。

S　季節の変わり目は、寒暖差で体調を崩しやすい時期です。感染症対策に気を配りつつ、元気な笑顔で過ごしましょう。

協会・事務局コーナー

令和8年度 第33回群馬県老人保健施設大会　開催概要

令和8年度の群馬県老人保健施設大会についてご案内いたします。これからの老健施設の在り方を参加者の皆様といっしょに考える大会です。ぜひご参加ください。

■大会テーマ
超高齢化社会に向けた老健の取り組み
～今後あるべき老健の姿～

■開催期日　令和8年11月28日（土）

■会　場　カルピス®ホール（館林市文化会館）

■主　催　公益社団法人　群馬県老人保健施設協会

■大 会 長　介護老人保健施設 虹の郷すわ
理事長 田渕 肇 先生

■後　援　群馬県、館林市、群馬県市長会、群馬県町村会、群馬県社会福祉協議会、群馬県医師会、上毛新聞社、群馬テレビ、FM GUNMA

■特別講演　午後の部
「超高齢社会における認知症診療の未来」
大阪精神医療センター
脳とこころの未来医療センター
池田 学 センター長

■シンポジウム　午後の部
「超高齢化社会に向けた取り組み
～それぞれの立場から～」
大会長と東毛ブロック老健施設職員
（看護、介護、リハビリ、相談）とのディスカッション

■問 合 せ 先　**群馬県老人保健施設協会**
TEL 027-233-0350